

【論文要約】

認知症高齢者ケアにおける生活の安定への変容過程に関わるなじみの検討

日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程

浪花 美穂子

序章 本研究の背景

本章では、本研究の背景と、本論文の研究の全体構成を概観した。

記憶障害を伴う認知症高齢者にとって、転居にともなう環境の変化は、見当識の低下による混乱や不安など過度のストレスと関連し、BPSD (behavioral and psychological symptoms of dementia: 認知症の行動心理学症候) を誘発することで本人の精神的安定に大きく影響を与える。そのため、施設入所に伴う認知症高齢者ケアにおいては、急激な環境の変化を避け、徐々に慣らしながら安心して生活できるケアを行うことが重要であり、高齢者介護施設では、入居者にとってなじみのある使い慣れた家具や物などを持ち込むなど物理的側面から環境整備の支援や工夫を行う取り組みが行われている。

これまで認知症高齢者ケアにおいては、「なじみの関係づくり」や「なじみの継続」のように「なじみ」のケアが介護職員の経験的側面から重要視されてきたが、「なじみ」を意識したケアの具体的な在り方は施設や事業所の方針あるいは介護職員各自の裁量に任せられ、その本質的な意味を問われることはなかった。そのため、「なじみ」を意識したケアが認知症高齢者ケアにおいてどのように本人に効果があるのか、特に「生活の安定」との関連を実証的に明らかにした研究は限られおり、研究蓄積の必要性を感じる。

従来の介護の歴史が、試行錯誤を繰り返しながら、熟練した技や感受性、洞察力を経て経験を重ねていくものであったように、認知症高齢者ケアにおいてもこれまでの介護職員の実践の積み重ねからエビデンスを検証し方法論を確立させていくことは認知症高齢者数の急増という社会的背景を考慮した場合、急務の課題であると言える。そこで本論文は、介護職員が捉える「生活の安定」と「なじみ」の概念がどのように関連しているのかを実証的に明らかにすることとした。

第1章 先行研究の検討および本研究の目的

第1章では、認知症高齢者の「生活の安定」および「なじみ」に関連する文献レビューを行った。先行研究の検討により、「生活の安定」および「なじみ」に関しては現場の実践者の経験的蓄積によるものが主流であり、そもそも概念の定義づけがなく、要因や変容過程、特に心理的側面に着目し明らかにした研究は限られていることがわかった。しかしながら、認知症高齢者が新しい施設へ入所したり、事業所の通所を開始した場合、環境の変化による大きなストレスを要因にBPSDが増加し不安定な状態へ陥る場合が多いと考えられるが、何らかの要因により新しい環境下でも自己空間(領域)の確保や主体的な位置づけの確立を得て安定に至ることが可能であるという仮説を得た。また、その安定の要因の一つとして「なじみ」があると推察し、それには言語化されない無意識下での心理的影響が大きく関わっていると推論した。

そこで、本研究では、認知症高齢者の施設入所（通所）後の不安定な状態から安定した状態へ至る過程において、特に「生活の安定」と「なじみ」との関連を明らかにすることを目的にし、認知症高齢者ケアの援助的視点を得ることとした。なお、本研究に関しては実証的な先行研究が少ないことから仮説検証的な方法をとることは困難と考え、質的分析を中心に仮説的理論モデルの精緻化をはかることで仮説生成的に研究を進めていくこととした。

第2章 生活の安定となじみにかかわる質問紙調査

第2章では、前章で提示した目的を遂行するための第一段階として、認知症高齢者ケアに従事する介護職員を対象とした質問紙調査を実施した。具体的には、介護職員が捉える認知症高齢者の「不安定な状態」、「安定した状態」、「安定した理由(要因)」、「本人の内面的変化」の4項目についてそれぞれの状態像を自由回答により求め、計量テキスト分析および内容分析の手法により、「安定の要因」と「なじみ」の関連について明らかにした。

東京都福祉保健局の施設一覧に掲載されている特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、小規模多機能型居宅介護事業所、認知症高齢者グループホーム 1,263 ヶ所の施設に調査票を配布し 199 名から回答を得た(回収率 15.7%)。未記入を除いた有効回答ケース数は 454 ケース(平均回答数/人は 2.28)であった。

「安定した要因」の形態素解析の結果から、「他者」と一緒に何かを行うというような「人と関わる」経験が「安定」するための要因として示された。特に「声かけ」という語が多く抽出され、介護職員の多くが「声かけを行う」ことを基盤に本人の安定を図っていることが示唆された。また、抽出された語を確認すると一貫性やまとまりがなく様々な意味内容を持ち、特定の解釈を示す文脈のものではないことから、介護職員は「安定した要因」として特定の側面に限らず様々な側面からその要素を捉えていると解釈した。

さらに、「安定した要因」の内容分析の結果から、認知症高齢者が安定する要因として 18 のコアカテゴリーを抽出した。〈多職種連携・カンファレンス〉〈アセスメント〉〈医療的管理〉〈日常生活行為〉等の基本的な介護の展開そのものが安定の要因として重要であると同時に、特に〈本人を尊重した関わり〉や〈他者との関わり〉といった本人の存在と価値を認め尊重した関わりを持ちながら、他者と十分な交流を図ることが安定により有用であることが明らかとなった。また、〈人を尊重した関わり〉〈他者との関わり〉〈日常生活行為〉〈生活基盤のための声かけと関わり〉〈個別作業や活動〉〈居心地の良い居場所〉〈生活歴〉〈本人の好み〉の 8 つのコアカテゴリーのうち 7 つが「人なじみ」の形成に関連していると捉えた。

「なじみ」は、生活の安定への直接の要因と考えるよりも、安定の要因のひとつである〈他者との関わり〉を構成する要素である「なじみの人との関係」として重要な位置づけを示すと推察した。さらに、「なじみ」には、在宅で形成したなじみを基盤として施設生活の中で新たに発展させる「なじみ」と、施設利用に伴い新たに形成する「なじみ」の 2 通りがあり、これらを活用したケアが本人の安定に有用であることが示唆された。

第3章 生活の安定となじみの人間関係に関わるインタビュー調査

第3章では、認知症高齢者がどのように新しい生活になじみ、生活を安定させていくのか、その変化の過程を詳細に明らかにすることを目的とした。特に、第2章の調査結果をうけて、

施設入居（通所）に伴い形成される「なじみの人間関係」に焦点をあて、本人の心理的変容過程を明らかにすることとした。具体的には、施設入所に伴い新たに形成する「なじみの人間関係」に焦点をあて、安定に至る本人の心理的変容の過程について、介護職員 3 名を対象に半構造化インタビュー調査により明らかにした。

分析には人間の時間的変化を社会・文化・歴史との関係で展望することを目指す方法論である TEM(Trajectory Equifinality Model:複線径路・等至性モデル)を用いた。TEM は定量的に記述することが難しい事象を分析するために開発されたモデルであり、人間の発達と人生径路の多様性と複線性を捉え描き出す質的研究法である。時間を捨象して外在的に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視する点が本調査に適していると判断し採用した。なお、「なじみ」は、新たな環境に「なじむ」という過程（プロセス）を経ることで形成されるものであると考えられることから、本章では、なじみの人間関係を形成する過程（プロセス）に焦点をあてるため、分析に「なじむ」という用語を用いた。

介護職員 3 名の「語り」を TEM を用いて可視化し、認知症高齢者が施設内で安定するまでの心理的変容の過程について共通性と多様性を見出した。分岐点を基準に第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期の三つに時期区分し、第Ⅰ期では、不安定な心理状態が増加することで自分が心地よいと思える居場所がないという不安感の増大に至る径路を捉えた。続く第Ⅱ期では、自分が置かれている状況をどの程度理解し納得感を得ているかがその後の本人の〈安定する〉に至る等至点への分岐に影響することを捉えた。続くⅢ期では、他者に対して目的をもった言動や主体的な言動がみられるかが〈安定する〉に至る等至点への分岐として捉えた。Ⅱ期からⅢ期への変容の過程では、たとえ認知症による記憶障害を有していたとしても、自分は相手に何ができるだろうかといった他者を配慮する心理的変容が生じていることが示唆され、自己と他者との関係性の拡大が見出された。

第 4 章 総合考察・結論

第 4 章では、本研究の結果と考察を統括し総合考察を述べ、最終的に得られた知見と成果についてまとめ、結論とした。

GH の創設とともに、「なじみの関係づくり」や「なじみの継続」のように「なじみ」のケアが介護職員の経験的側面から重要視されてきたが、その具体的なあり方は明確化されておらず言葉だけが一人歩きし頻用されてきた。本研究は、この「なじみ」に着目し、認知症高齢者の時間経過における「生活の安定」との関連性を検討したものであった。

本研究によって、認知症高齢者ケアにおいては、2 通りの「なじみ」を意識したケアが本人の安定に有用であることが示唆された。

第 1 に、自室になじみのある家具や写真などを設置したり、ご家族の協力のもと本人が使いなじんだ日用品の持ち込みと居心地良い居室づくりを実践するといった支援、つまり本人が在宅で形成したなじみを基盤として施設生活の中で新たに発展させる「なじみ」に基づいたケアが、本人の生活の安定の要因として有用に作用していると示唆された。

第 2 に、施設利用に伴い新たに形成する「なじみ」が生活の安定の「安定」において重要な位置づけにあることがわかった。記憶障害を有し新しいことを覚えることは困難とされる前向き健忘の認知症高齢者や重度の認知症高齢者であっても、施設入所後に新たに出会った

職員や他者と「なじみの関係」を構築しながら「安定」へ至る過程が示された。また、なじむことにより、自己と他者との関係性が拡大し、それにともない他者を気遣ったり配慮するという変容が存在することが示唆された。介護職員は、少人数で変わらぬ環境での平穏をよしとするのではなく、本人との関係性の中でより多くの意味関係を見いだせるような積極的な関わり方をすることが重要であり、これによりなじみの関係がより強固されていくと推察される。

本研究はいくつかの限界と課題も存在する。まず、本研究における質問紙調査およびインタビュー調査は、認知症高齢者が「安定」に至る事象を介護職員の認識という一側面から捉えたものである。そのため、認知症高齢者本人の認識を正確に代弁したものではなく、介護職員による援助的思考に基づいた記述および語りの結果であり、当事者の認識とは異なった結果であることは否めない。また、調査対象人数に関して、本研究では TEM の方法論の「 4 ± 1 人の設定」を採用し調査を行った。今後は、さらに多様化された知見を得るために経路の類型を描くことができるとされる 9 ± 2 人の設定に沿ったデータの収集および分析を行う必要がある。さらに、インタビュー調査では、事例の対象者全てが 1 年未満に〈安定する〉に至ったと判断されたが、「語り」のなかで述べられていたように 1 年弱という短期間で安定に至るケースは希であるという見解を考慮したうえで先行研究による所論も踏まえ、今後は「安定に至る期間」を勘考した再調査が必要であると考ええる。また、施設種別や本人の状態像（認知症種別、記憶障害の程度等）により、ケアのあり方は大きく異なることも考えられるため、属性別の検討についても今後の課題とする。

最後に、本研究では、「なじみ」の概念を「生活の安定」との関連から捉えたが、「なじみ」を構成する要素までを明らかにしたとは言えない。「なじみ」の概念はかなり複雑な心理的変容であると考えられることから、今後も詳細な検証が必要である。